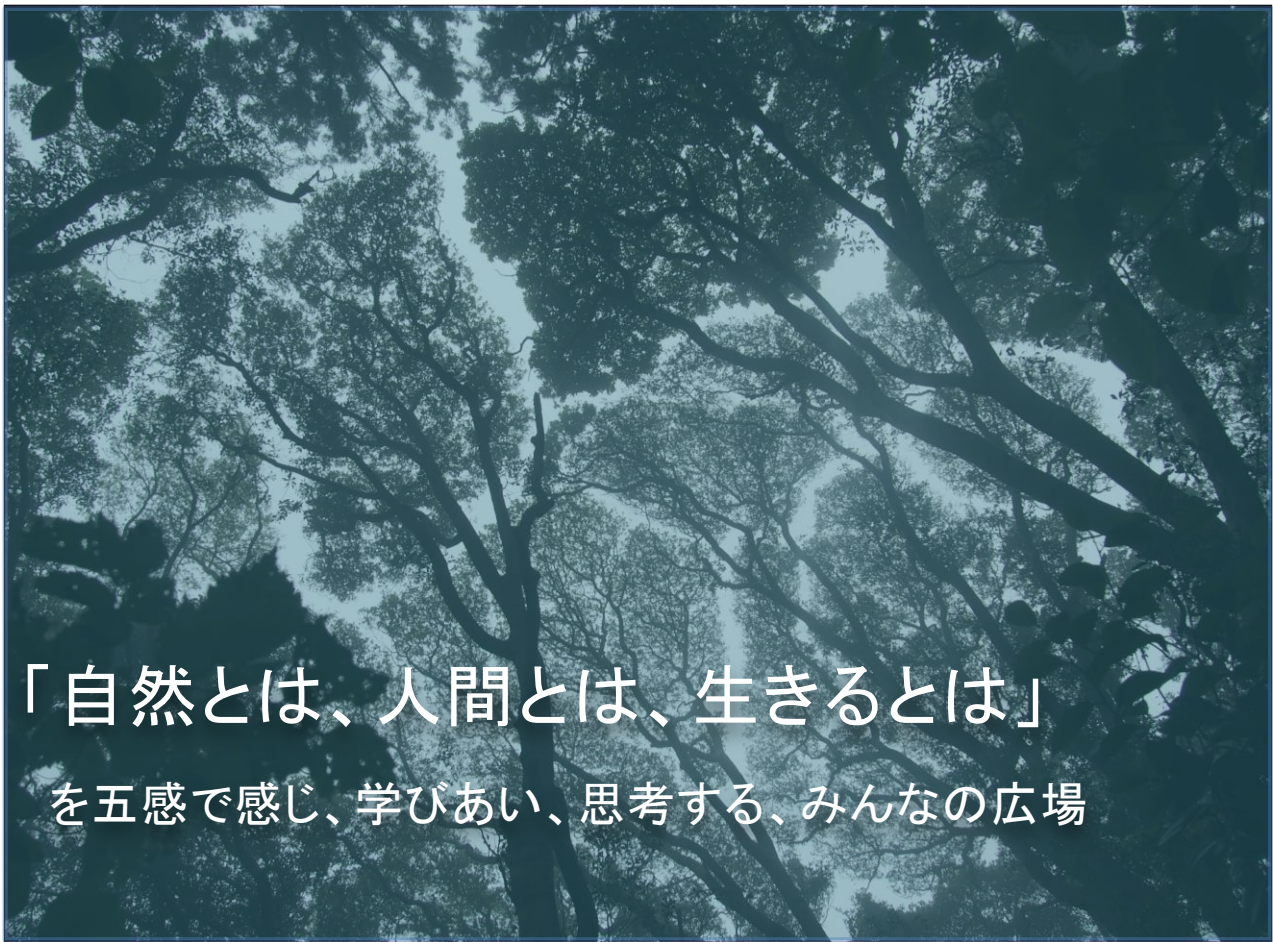

南三陸町震災伝承施設 基本計画



「自然とは、人間とは、生きるとは」
を五感で感じ、学びあい、思考する、みんなの広場

2019/06/27

1 南三陸町震災伝承施設の整備目的

①東日本大震災の大津波による

南三陸町民の被災体験を伝える

2011年3月11日金曜日 14時46分、震度6弱の揺れにつづき、南三陸町を襲った大津波は、800名以上^{*1}の人々の命を奪い、建物のおよそ60%^{*2}を跡形もなく破壊しました。

^{*1} 死者 620人(直接死600人(うち町民の方551人、町外の方48人、不明1人)、間接死20人)

行方不明者 211人(うち町民の方210人)

^{*2} 全壊 3,143戸(平成23年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の58.62パーセント)

半壊、大規模半壊 178戸(平成23年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の3.32パーセント)

半壊以上の計 3,321戸(平成23年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の61.94パーセント)

町役場や病院をはじめとするほぼすべての公的施設が流失し、町のすべての機能は壊滅しました。2011年3月19日には、33の避難所に9,753人^{*3}が避難を余儀なくされ、その後、長きに渡り仮設住宅での避難生活は続きました。わずかに山間の入谷地区などは津波被害を受けませんでしたが、町の重要な施設が津波浸水地域にあったため、ライフラインの復旧には多くの時間を要しました。^{*4}

^{*3} 2011(平成23)年2月末日現在住民基本台帳 人口17,666人 5,362世帯

^{*4} 電気／地震発生後、町内全域で停電。2011年4月中旬から復旧が開始され、同年5月末にほぼ全域で復旧。

水道／地震発生後、町内全域で断水。一部地区の仮通水(飲用不可)から復旧を開始し、2011年8月中旬にほぼ全域を飲用可能として復旧。

1960(昭和35)年5月24日のチリ地震津波をはじめとした過去の被災経験から、毎年防災訓練を実施するなど災害に強いまちづくりを進めてきた南三陸町でしたが、尊い人命と先人から受け継いだ財産、長きにわたり多くの人々の手で形成されてきた社会基盤、人々の記憶を宿した数々の場所や長年継承された文化資源を一瞬にして失うこととなったのです。

私たちは、人間にはあらがえない自然の猛威を思い知り、喪失の中で一人ひとりが生きることに向き合った町民の被災体験を、防災に役立て、命を守るための知恵を未来に継承していくことは、南三陸町震災伝承施設の使命です。この施設は、南三陸町民が語る体験談を世界に公開し、またそのアーカイブから学習プログラムを構築して、防災教育の拠点となることを目指し、二度と尊い命を犠牲にすることのない未来へ、南三陸町は貢献していきます。それこそが、全国・世界からいただいた有形無形の支援への恩返しであると考えます。

南三陸町震災伝承施設は、町内外のだれもが自分ごととして災害をとらえ、「自然とは、人間とは、生きるとは」を五感で感じ、学びあい、思考するラーニングセンターです。

②全国・世界からの支援への感謝を伝える

命からがら避難した町民のほとんどが、家や生業を目の前で失いました。着の身着のままで生き延びた人々は、水も食料も電気もない中で助け合いながら、その後を生き抜いたのです。家族や親しい人が犠牲になり、先の見通しも立たない状況で、南三陸町の人々が互いに助け合い、力を合わせて生き抜く姿は、日本全国、そして世界の人々を感動させました。

発災後6カ月間、報道の出現回数がきわめて多かったこともあり、多くの人々が南三陸町に関心を寄せ、数多くのボランティアが訪れることにつながりました。困難を極めた避難生活、復旧・復興への道のりは支援者に支えられた日々でもありました。

町民はきびしい現実に向き合いながら、決してあきらめることなく、生業を、住居を、コミュニティを再生させ、より創造的・生産的に自然との関係性を結び直す復興の道を選択して歩み続けています。

森林の国際認証取得や、日本初となる牡蠣養殖の国際認証取得と、志津川湾のラムサール条約湿地への登録など、震災後、南三陸町は環境に配慮した一次産業のあり方を先駆的に具現化してきました。自然環境を守りながら、自然と生産的な関係を創り出すことで、南三陸町は新たな価値を生み出してきたのです。

新たな知見やノウハウ、そして前に進む勇気をもたらしてくれたのは、支援者のみなさんでした。

どんな苦難の中でも屈することなく、支援者たちと復興の道のりを歩んできた人々の姿、互いに支え合いながら復興の道を模索した町民の姿を誇り高く伝えることで、ご支援への感謝を表します。

南三陸町震災伝承施設は、町民たちの感謝の思いを、来場者に伝える場所です。

③唯一無二の体験と感動を与える観光交流の拠点が 南三陸町の未来を輝かせる

長く続く復興の過程で、町の人口は減少した一方で、南三陸町を支援してきた人々、多様な団体・企業との交流は、今なお続いています。三陸縦貫自動車道が日々延伸している今、広域連携を視野に、観光関連産業のみならず、水産業や農林業、そして地域社会の裾野を広く活性化する手段として、交流人口を拡大させることは重要な取り組みです。

広域の被災自治体が協力・連携しながら、エリアにビジターを呼び込み続けることこそが、沿岸部の経済活性化につながります。また一方では、連携を図っていく上でも、産業構造が類似している被災自治体と差別化される魅力を創出していかなければなりません。

南三陸町第2次総合計画は、「森 里 海 ひと いのちめぐるまち 南三陸」を町の将来像に掲げています。これをいち早く体現したのが、ラムサール条約湿地に登録された豊かな“海の森”が育む豊富な水産資源と林産資源に付加価値を生み出す国際認証取得という先進的な取り組みです。自然環境を守りながら、生産的な取り組みを両立させる「いのちめぐるまち」づくりは、国際的にも注目されています。

今回の町民の被災体験が、この「いのちめぐるまち」づくりへの原動力になったことは言うまでもありません。

南三陸町はその背景を揺るぎない根拠として、「いのち」や「生命の循環」、「自然に内包される人間の存在」について世界の人々に問いかけ、思考させることができるのです。

南三陸町に行くと、「いのち」について考えたくなる。

「自然とともに生きるとは何か」を自分自身に問いたくなる。

「人間の存在とは」を語り合いたくなる。

このような場は、南三陸町に付加価値を生み出し、ビジターを呼び寄せ続けます。

南三陸町の交流人口を拡大させるためには、人々の関心の対象となり続ける町の拠点が必要です。

南三陸町震災伝承施設は、南三陸町の未来を拓く鍵です。

南三陸町は、全国・世界の人々にとって“一度は行ってみたい場所”、“また行きたくなる場所”になるため、南三陸町震災伝承施設を整備します。

④町民が被災後の自分たちの生き方を見つめ

被災体験を語り合い

自らを誇りうる“みんなの広場”になる

南三陸町民が、震災からこれまで歩んで来た自らの存在を、心の底から誇れるようになった時、初めて一人ひとりの復興は実現します。

そのためには、町民自らが体験をお互いに語り合える場所が必要です。これまでだれにも話すことができず、心に封じ込められた体験も、この場所なら他者と共有することができる「みんなの広場」が必要です。南三陸町震災伝承施設は、町民たちの「みんなの広場」になります。

また、被災体験の伝承は、町民が語り合うことでこそ、継承されていくものです。東日本大震災で役立ったのも、親から子へ、子から孫へと日常生活の中で語られてきた体験の教えでした。新しいコミュニティが形成された今、町民同士の語り継ぎの場を意識的につくり出すことなしに、震災を未来に伝承することはできません。

被災者同士が語り合う場、他者と体験を共有する場は、同時に被災者の心の傷を癒します。筆舌に尽くしがたい体験も、他者と共有する過程で、少しずつ少しずつ記憶の引き出しの中に整理されていきます。

さらに、震災を乗り越え、互いに助け合った自分たちの素晴らしさを、他のだれでもなく、町民自身が誇りに思えることが重要です。ビジターとの交流は、南三陸の有形無形の地域資源を、町民に再発見させます。ふるさとを自慢できる場所、町民が集まり語り合える広場となることで、町民は生きがいを見つけることにつながります。

南三陸町震災伝承施設は、交流の拠点であると同時に、町民がこの町に生きることを誇ることができる場所、シビックプライドを発信する拠点です。

町民一人ひとりがアイデンティティを確かめることができる、地域の誇りとふれ合える場所は、全国・世界の人々を惹きつけます。

全国・世界の人々に、南三陸町民の生き方や暮らしの中に息づく文化を誇り高く発信し、南三陸町民の心を真の復興へと導く「みんなの広場」として、南三陸町震災伝承施設を整備します。

2 広域連携を図るために

①隣接自治体の震災伝承施設

沿岸の被災自治体には、それぞれに震災遺構と伝承施設が整備されています。また、全国各地には、激甚災害に関する類似の施設は多々存在しています。

特に隣接する石巻市は、東日本大震災で最大の犠牲者を出し、多くの支援者との交流が続いています。大川小学校は、犠牲になった74名の児童の姿と重なり、その悲劇を多くの人に伝える震災遺構となっています。また子どもたちや教職員の犠牲を無駄にすることなく、防災・減災をそれぞれに考えてもらうために教訓を伝えようと伝承・防災学習活動が続けています。さらに、国営の震災祈念公園も整備予定で、リボンアートフェスティバルなど、大規模なイベントが実施され、仙台からのアクセスも便利です。

気仙沼市には2019年3月10日に旧気仙沼向洋高校が震災遺構・伝承館として開館しました。圧倒的な津波の爪痕を遺す校舎は、自然の猛威の無常さと人知を越えたパワーを実感できる衝撃的な施設です。襲いかかる津波の映像、津波の後の変わり果てた街の姿、そして、傷跡も生々しい校舎そのものが、訪れる者に津波の怖ろしさを体感させます。

三陸縦貫自動車道が延伸し、南三陸から30分ほどでアクセスできる場所に立地しています。

また、リアスアーク美術館にも、津波被災物が収集され、それぞれのものに込められた物語とともに展示が行われており、多くの来館者を集めてきました。

②広域の中で“行きたい施設”になるために差別化を図るラーニング

南三陸町には、保存するか否かについて未決の防災対策庁舎が、施設整備予定地の対岸にありますが、その他の被災公共施設はすでに復旧され、震災の爪痕を刻んだ遺物も、南三陸町ではほぼ現存していません。上記の両者と比べても、展示物や遺構としては、迫力を欠くことは否定できない状況と言えます。

しかし、震災時、そしてその後の町民一人ひとりの体験は、次世代に伝えるべき示唆に富んでいます。町民の体験談、収集した資料や写真、動画をもとに学習プログラムを構築し、提供することができれば、他施設とは一線を画した震災伝承施設として、差別化を図ることができます。

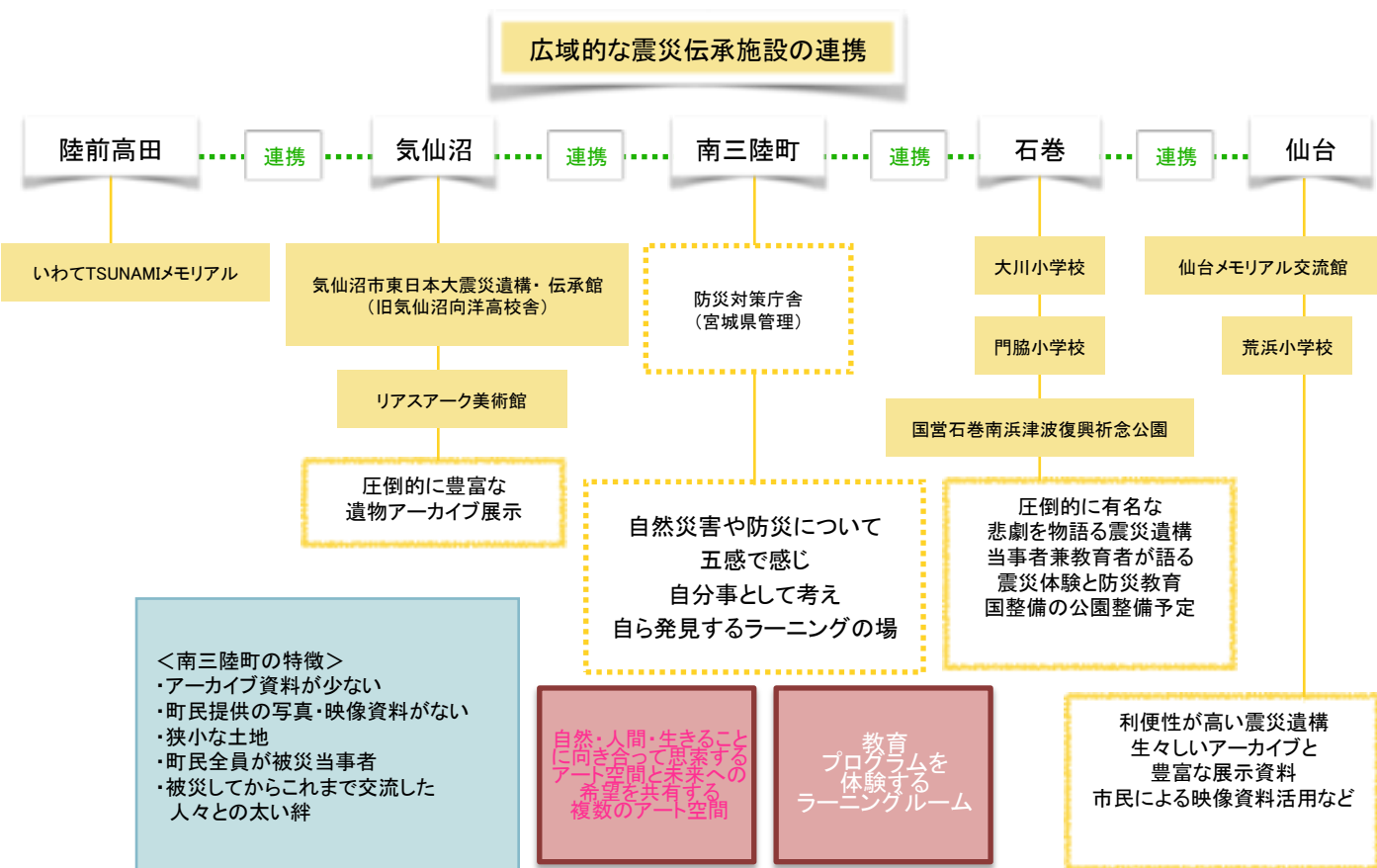
南三陸町の伝承施設は、津波被害の映像や写真、遺物展示を主軸とした伝承施設ではなく、アーカイブの映像や写真をもとに構築された学習プログラム(映像や問いかけ、データなどが投影される中で、防災について疑似体験をしながら考えるプログラム)を体験することで、防災について自分ごととして主体的に学べる施設とします。

③『自然とは、人間とは、生きるとは』を問い直す場

震災伝承施設でもっとも大切なことは、訪れた人に自分ごととして災害に向き合わせ、そこで起こり得ることを想像させ、自らの行動について考える機会を与えることです。津波の破壊力や怖ろしさを知るだけではなく、被災した人々の心の中にある決して消えない悲しみ、生き残った者のつらさ、苦しみ、ぽっかりと穴が空いたような喪失感など、被災した人々の立場に立って想像することが、防災への意識やスキルを高める意欲につながります。また、被災のどん底から立ち上がり、ふるさとに生きる喜びを胸に誇り高く生き抜く町民の姿から、人生に資するものを得ることもできます。

南三陸町震災伝承施設は、“人間は自然に内包される存在”であること、“生かされている命”のこわれやすさと重さ、そしてその強さを、人々に発見させる場となります。

「自然とは、人間とは、生きるとは」という問いを投げかけ、人間を思索へと誘う場と、「今、ここに存在し生きること」そのものが喜びと希望そのものであるという発見の場の両方を備えた南三陸町震災伝承施設。その場所から、人々は勇気と希望を持ち帰ることを目指します。



3 施設周辺の賑わい創出

①ビジターの周辺回遊を促す拠点に

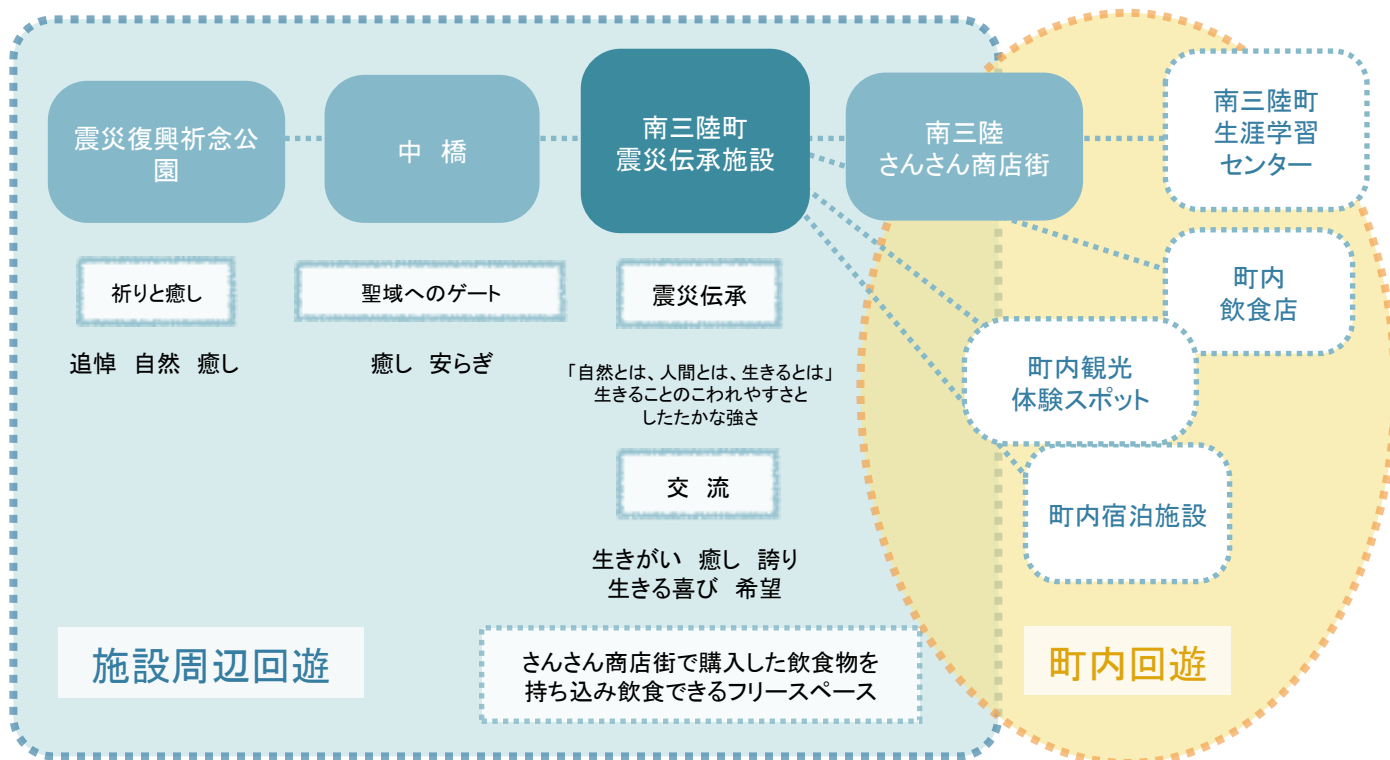
南三陸さんさん商店街、中橋（人道橋）、震災復興祈念公園、町内飲食店、生涯学習センターなど、周辺には南三陸を代表する魅力的な施設があります。南三陸町震災伝承施設を訪れた人々にこれらの施設の回遊を促すことも大きな役割です。

ラーニングプログラム体験は時間毎の入れ替え制を予定しているため、入場時間を待つ間の商店街利用や施設周辺の回遊を生み出します。

②町内の隅々にビジターを送り出すハブとして

南三陸町震災伝承施設を訪れた人々を、南三陸さんさん商店街や震災復興祈念公園、さらには町内の飲食店や宿泊施設、入谷、戸倉、歌津地区の隅々まで送り出すポンプのような役目を果たすことも、この施設の大きな役目です。この施設は、町内のさまざまな体験へとビジターをつなぐツアーデスクとしての機能を目指します。

言うまでもなく、南三陸町震災伝承施設は、南三陸町に人を呼び込み、町内に人を送り出すハブ機能を備えた観光交流拠点です。



4 南三陸町震災伝承施設の基本コンセプト

①基本理念

東日本大震災に関わる南三陸町民の記憶と体験の伝承を通して
「自然とは、人間とは、生きるとは」を五感で感じ、学びあい、思考する
「みんなの広場」

②ミッション

- 南三陸町民の被災体験と復興への道のり、自然の脅威、自然と生きる人間の力について、自分ごととして捉え、一人ひとりが防災スキルを高めることができるラーニングプログラムを提供する。
- 国籍・言語を超えて、上記の体験を提供する。
- 南三陸町民や関係者の証言映像などの貴重なデジタル資料や著作権・肖像権を伴う資料を、適切に管理・保管し未来へと継承する。
- 南三陸町民や関係者の証言などを取材し、アーカイブする。
- ご支援をいただいた全国・世界の人々へ感謝を伝える。
- 世界の人々が訪れ続ける拠点となり、町のにぎわいの要となる。
- 町民同士がこの体験について語り合い、この町に生きる喜びと誇りを見出せるような交流の場を継続的に創り出す。
- 南三陸町のシビックプライドを全国・世界に表明する。
- 運営資金を確保できる運営を目指す。

5 南三陸町震災伝承施設の機能

1 ラーニングセンター機能

①「自然とは、人間とは、生きるとは」に向き合い、 生きることのこわれやすさと強さを知る

訪れる者に「自然とは、人間とは、生きるとは」という問いを投げかけ、一人ひとりが自分ごととして思考するアート空間を創出。アートの力で、深い内的体験を言語を超えて一人ひとりに呼び起こす空間は、ビジターを観光気分から脱出させ、“聞かされる”という受動的な姿勢から、“自ら考え自ら発見しよう”という能動的な姿勢へと導きます。このアート空間はラーニングルームのアプローチであり、入場者すべてをデータや写真では伝えきれない深い内的体験へと誘います。「自然とともに生きることのこわれやすさとそのしたたかな強さ」を発見することができるようなアート空間とします。その主体的な体験は、ラーニングルームを経て、フリースペースのアート空間での「今、生きることに喜びと希望を見出す」内的体験へとつながる心の旅の始まりを与えます。

②「あの時、自分なら」を体験する

四方の壁と床がスクリーンになるラーニングルームでは、さまざまな選択や思考を迫られる約45分のプログラムを体験していただきます。

天井以外の面に映像や文字が映し出され、日本語のナレーションによりプログラムは進行しますが、同時に日本語、英語、繁体語の字幕が投影されることで、聴覚障がい者と海外からのビジターに対応します。（すべての面にに常時映像が映し出されるわけではありません。）

ファシリテーターがプログラムを進行し、映像プログラムの管理も行います。

映像や問いにより、参加者一人ひとりが被災を自分ごととして捉え、その中で思考し、話し合い、選択します。明快な解答がある問いだけではありませんが、参加者はこの部屋を出た後も、ここで体験した葛藤を持ち帰ることになり、友人や家族とその問題について語り合う機会も創出します。

③感謝を伝え、創造的な復興を誇らしく発信する

南三陸町民が全国・世界からの支援によってどんなに勇気づけられたかを、参加者は映像から実感します。

また、この町の創造的な復興のために町民が歩んで来た道のりを誇らしく発信し、震災によって生まれた南三陸町の新たな価値について伝えます。

④千人千話～それぞれの震災

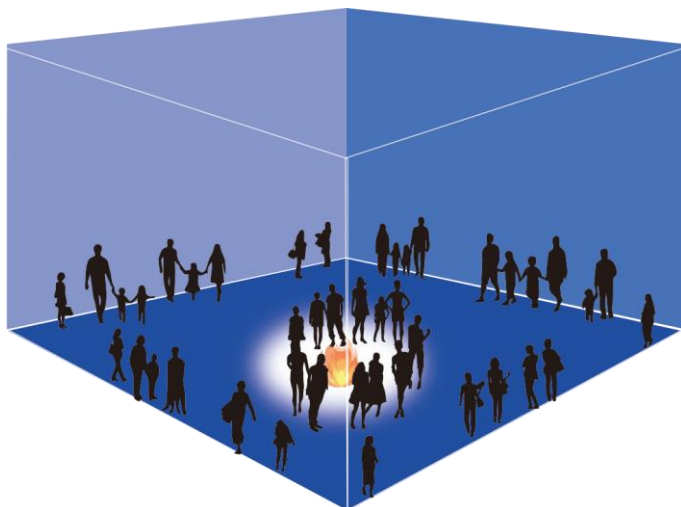
南三陸町民一人ひとりに震災体験があり、被災から復興してきた長い苦難の道のりがあります。町民がさまざまなテーマで体験を語るインタビュー映像を短く編集し、WEBサイトで公開します。常に南三陸町からの情報は世界に公開され、世界中の学術研究機関、学校、企業研修などで活用できるようにします。この映像は、館内のQRコードからお手持ちの端末で閲覧できるようにします。

⑤思考を深める資料展示

WEBサイトを活用した上記展示のほか、メディア提供による映像や写真、数的なデータなどを館内にパネルやバナーの形で展示します。また、震災前の町のジオラマなども、町民の語り合いに活用していただけるように展示し、季節毎に展示替えを検討します。

ラーニングルームのイメージ①

- ラーニングルームの床と四方の壁はスクリーンとなり、写真、映像、文字などが投影されて、入場者をさまざまな状況に出会わせる。投影されるのは写真、動画、インタビュー映像、それらを解説するキャプションや問いなど。
- Q&Aのクイズ形式ではなく、安易な答えは出せないような問いについて、葛藤しながら思考するプログラムとする。
- ナレーション音声は日本語。日本語、英語、繁体語の字幕が同期して壁に投影される。
- 原則的には、あらかじめ制作された映像プログラムが流されて進行するが、ファシリテーターが進行を補助する。映像プログラムのオン、オフやグループごとの話し合いの開始や終了を告げたり、参加者に意見表明を促したりするときに、ファシリテーターがタイムキープをしながら進行する。
- 入場者は意思表示のための赤と青のカードなどを手にして、意思表示し、参加者同士が考えを共有する。
- プログラムは、児童用／生徒用・大人用の2種類プログラムを準備する。季節毎にプログラムの一部を更新しながら、さまざまな観点から学びを提供する。プログラム・コンテンツを蓄積し、団体からの学習したい内容のクエストにきめ細かく対応できるようにする。
- 限られた空間で変化に富んだラーニングプログラムをフレキシブルに提供でき、短時間に内容を変えられる。
- 団体の場合には、グループ毎にディスカッションする時間を設け、思考を深める。
- 1回の入場者定員は参加者全員が主体的に学べるよう、最大で50名程度とする。ただし、団体客だけでなく、少数のビジターでも満足度が低下することのないようにプログラム内容を検討する。
- 参加者はファシリテーターとともに約45分のラーニングプログラムを体験していただくことを基本とするが、年齢層等を考慮した短時間でのプログラム提供についても検討する。1回ごと総入れ替え制で運営する。
- 空間専用のスツールが用意されており、プログラムの進行とともにスツールにすわったり、スツールを持って移動しながらプログラムを体験する。
- 時間外の空間の貸し出しやイベント開催は可能だが、プロジェクターや照明機器の位置の移動は不可。
- 飲食不可。
- 土足不可。床面を守るために、入室前に専用スリッパに履きかえていただく。



ラーニングルームのイメージ②

アプローチのアート空間で

1 「自然とは、人間とは、生きるとは」を自らに問う

あらがえない自然の力の大きさ、そこに内包される人間のこわれやすい存在に気づき、「生きるとは何か」を思索するラーニングの前室。アートの力を活用し、多面的な視点と深い思考を誘う。

- ・アート空間の中で、「自然とともに生きることは、こわれやすいものである、しかし、それはそう見えながらも、続いていくものだ」ということに思いをいたす。
- ・データや写真では伝えきれない、目に見えない思いに向き合う空間。
- ・ビジターはここで、自分自身の心の内を見つめ始める。
- ・ラーニングルームでの主体的な学びに向けた心の準備ができる。

ラーニングルームの中で

2 失われた風景～着の身着のままになるということ

部屋の中に全員が入ると、照明が変わる。

すべての壁と床に震災前の南三陸の景色が映し出される。

やがてその風景は震災後の景色にクロスチェンジ。

NA「あの日、南三陸町で生きてきた私たちの人生は一変しました。津波は私たちからすべてを奪い取りました。今ここにいらっしゃるあなたは、下着や服を身につけ、バッグやリュックを持っていますね。私たちにあの日残されたものは、その日身につけていたものだけでした。今のみなさんのような姿で私たちは街が流されていくのを見つめていたのです。」
※ナレーションに同期して壁に英語と繁体語の字幕が出る。

- ・震災前の町の姿を知り、変わり果てた被災後の風景を知る。
- ・すべてを失った被災者に自分自身が重なり、着の身着のままになる感覚を追体験する。
- ・ナレーションは日本語。壁に日本語、英語、繁体語の字幕が投影される。

3 あの日、4つの場所で

部屋に用意されているスツールをとって着席する。※ファシリテーターが進行管理

当日、南三陸町の4つの地区の人々は、全く異なる状況の中で、生きるために力を合わせていた。

4つの地区の住民になって、直面する事態について考え、話し合い、選択する。

- ・4色のスツールは南三陸の4つの地域。
- ・ラーニングは町の4つの地域でのエピソードに基づき進行していく。それぞれの地域住民になって主体的に考えて行くための状況を創り出す補助として、スツールの色で、参加者を4つの地域の住民にグルーピングする。

ラーニングルームのイメージ③

4 波に囲まれて

海辺に立地していた戸倉小学校の子どもたちの避難について考える。

9日の予震による津波警報時、戸倉小ではマニュアルに従って3階建て校舎の屋上に避難した。

問い／11日の本震時、あなたが教師だったら、どこに避難するだろうか？

話し合い ※ファシリテーターが進行管理

考えの表明(赤と青のカードなどを使用) ※ファシリテーターが進行管理

戸倉地区カラーの椅子にすわった参加者は指示された位置に移動する

※ファシリテーターが進行管理

戸倉地区カラーの椅子にすわった参加者のいる場所以外は青くなる。

(プロジェクションで表現)

NA「子どもたちと教師は小学校の裏山の三鈴神社に避難しました。小さなお社があった山の上だけを残して、一帯はすべて津波に飲まれました。子どもたちは先生方と一緒に、わずかに残された陸地で一晩を明かしました。低学年の子どもたちはお社の中で、中学年以上の子どもたちは、たき火を囲んで一晩を過ごしました。津波が押し寄せる音が闇の中から繰り返し聞こえてきました。」

(たき火もプロジェクションで表現)

当時の教師の証言など

・9日の津波時にはマニュアルどおりに屋上に避難。しかし、避難は地続きの場所にすべきだという地元教師の意見により、11日は迷わず裏山に避難した。(当時の先生方の証言インタビュー)

・押し寄せる津波に囲まれ、家族と離れて過ごした子どもたちの心中、教師たちの心中に思いを致す。

5 コミュニティの力

津波被害を免れた入谷地区の立場で、被災した町民たちへの緊急的サポートについて考える。

停電、断水、繰り返す余震の中で、できることは何か？

話し合い ※ファシリテーターが進行管理

考えの表明(赤と青のカードなどを使用) ※ファシリテーターが進行管理

入谷地区の集会所では、各家にあった米と湧き水とプロパンガスでおにぎり作りを始めた。

コミュニティのつながりが、何千人もの命をつなぐ最初の食料をスピーディな供給を可能にした。

ラーニンググループのイメージ④

避難所での4人家族に与えられたスペースをプロジェクションで体験する。

▼
その面積を床面にプロジェクションし、実際にそこにすわったり寝たりして
その広さを体感する。

避難所運営で大切なことは何かを考える。

- ▼
- ・我慢と寛容、集団と個人。集団生活の難しさを想像する。
 - ・どんな備えが大切か、備えを生かすために必要なことについて考える。

6 町内各地区での被災体験から学ぶ

- ・歌津地区、志津川地区での町民の体験から思考する。
- ・上水道、電気などインフラの整備に携わった人々の体験に学ぶ。

7 その情報は真実か

被災時の情報把握のむずかしさを知る。
把握する情報の時間差、置かれた場所による情報差を知る。

- ▼
- ・正しい情報を得るために、どうすべきかを考える。
混乱の中、正しい情報を把握する難しさを体験。
 - ・人の記憶している情報のあいまいさを知り、記録の大切さを実感する。

8 応急復旧はどのようなものだったのか

がれき処理の状況や厳しい環境だった仮設住宅の状況から震災後の生活を感じる。

9 支援者と歩む

多くの支援者が南三陸にもたらした力とは？
新たな価値を生み出してきた復興の中に、全国・世界への町民の深い感謝を感じる。

10 南三陸人の哲学

南三陸人の自然観、復興への矜持、町の人々の誇りを感じる。

ラーニングルームのイメージ⑤

11 展示に向き合う

ホワイエにつながる通路沿いの展示／各媒体の映像・写真・さまざまな収集物の展示

フリースペースのアート空間で

12 「今、生きていることこそ、喜びと希望そのもの」であることに気づく

ラーニングルームで知った南三陸人の体験や再生や復活の姿が、フリースペースのアート空間で「自らが今ここに存在し生きることの喜びや希望」へと普遍化する。アートの力を活用し、未来への希望を、それぞれの胸に贈り届ける。

- ・アート空間の中で、人々は心の安らぎを得ながら、ラーニングルームでの体験を咀嚼しつつ、未来への希望を自らの存在の中に見出していく。
- ・ビジターは、この震災伝承館で悲惨な被災体験に触れながらも、生きることが喜びと希望そのものであることを実感する。
- ・フリースペースのアート空間は、人々の心に希望や未来への一步を喚起する。.....

2 アーカイブセンター機能

①体験者への取材・語り合いの記録

南三陸町民や支援者、関係者のもとに赴いてインタビューしたり、館内での語り合いの場にて、被災体験や復興までの体験談を映像に記録して、アーカイブ保存を行います。常に客観性の高い内容となることを重視して取材します。また、その際に、肖像権、著作権の使用許諾や公開について、本人の意向などを確認し、書面にして保存します。

震災を体験した世代がやがていなくなっても、そのアーカイブが未来に役立てられるようにデータを保存します。インタビューや語り合いの記録は、ラーニングプログラム制作者などと協議しながら、短く編集し、WEBサイトで公開します。また、新しいラーニングプログラムに活用します。

②遺物・写真・動画の収集

町民や関係者が持っている貴重な写真や動画、メモや走り書き、記録集などを収集・保存します。被災の爪痕を遺す遺物についても、保存を検討し、必要性の高いものは所蔵・保管します。

③ラーニングプログラム制作

収集したインタビュー映像、情報、資料などを総合し、さまざまな立場の方々に防災意識とスキルを高めるラーニングプログラムを構築し、使用する映像コンテンツを制作します。年間を通じて、インタビューや収集資料を分析し、施設を訪れるビジターのニーズや要望に応えるため、さまざまなテーマのラーニングプログラムを開発し、ラーニングルームの映像システムに適合した映像・音声を制作していきます。

年に2回は基本的なラーニングプログラムの内容を変えられるように、また、プログラムの時間を増減したり、訪れる団体の要望などにも細やかに対応出来るように、プログラム構築と映像・音声編集に専念できる人的体制を検討します。ラーニングルームの映像システムはシンプルなものとし、施設スタッフの手でプログラムを更新できるようにします。

④アーカイブの貸し出し管理・著作権・肖像権管理

収集したインタビュー映像や資料の貸し出し要請などに応えます。公開の可否などについては取材時に本人の承諾を得ますが、その内容を確認しつつ、貸し出しについての管理を行います。肖像権・著作権について、コンプライアンスが遵守されるよう、適切に管理します。

⑤WEBサイト運営

WEBサイトはそのものが町民が語る震災を自由に閲覧できる内容を目指します。当館がアーカイブした震災体験をWEBサイトで常に一定量紹介します。ラーニングプログラムは、当施設を実際に訪れなければ体験できません。内容の濃いWEBサイトを学校・企業などでおおいにご活用いただくことで、南三陸町に実際に訪れるインセンティブが生まれます。WEBサイトは施設内展示と連動します。

WEBサイト例

- ・町民などへのインタビュー映像のアーカイブの中から、年間約30本を短く編集して、WEBサイトで情報公開する。
- ・館内展示でQRコードを示し、さまざまなオーラルヒストリーを手持ち端末でご覧いただけるようにする。
- ・これらの映像をもとに教育プログラムを制作し、ラーニングルームでのプログラム構築に活用する。



3 交流センター機能

①住民の語り合いの場づくり

南三陸町震災伝承施設は無料で誰でも出入りできるフリースペースを設けます。そこでは、町民自らが体験をお互いに語り合える場づくりを継続的にを行います。これまでだれにも話すことのなかった体験でも、ここなら他者と共有できるというような場所、そして、その話が未来に生かされることが保証される場が必要です。町民たちが語り合うことで、被災体験は確実に未来に継承されます。

また、被災者同士が語り合う場、他者と体験を共有する場は、被災者の心の傷を癒します。

この町では、だれもが悲しみを背負い葛藤しながら、震災後を生き抜いてきました。その時間をみんなで認めあい、讃え合う場が町民に生きる力をもたらします。

②ビジターと住民の交流の場づくり

このフリースペースは、震災を乗り越え、互いに助け合った自分たちのすばらしさを、町民自身が誇りに思い、アイデンティティを確かめる場でもあります。そこでは、恒常的にビジターと町民が交流できます。この交流の場は、町民がふるさとさまざまな地域資源の価値を再発見し、自慢できる場であり、ボランティアな活動を通して自分自身の役割を見出し、生きがいを見出すことができる場を目指します。町民との生き生きとしたふれあいが、来町者をリピーターにしていきます。

③入場チケット販売管理

入場チケットは、チケットブースでも販売しますが、当日来場者を待たせることなく入場していただくためにも、また、繁忙期に待ち時間を少なくし、管理の負担を軽減するためにも、インターネットでの事前購入を可能にするなどの入場管理システムを検討します。定員以上の入場希望者には、待ち時間に周辺の回遊を促すなど、回遊の一定ルールを検討します。

④町内各地へビジターを誘導するインフォメーション及びツアーデスク

来町者を飲食店や他の観光施設、日帰りツアー、宿泊施設などに案内します。また、さんさん商店街で購入した飲食物を持ち込めるようなフリースペースの設置を検討します。

⑤自主事業企画運営の検討

イベントや特別展示などの自主事業を企画するなどして、町民の来場を促すことを検討します。

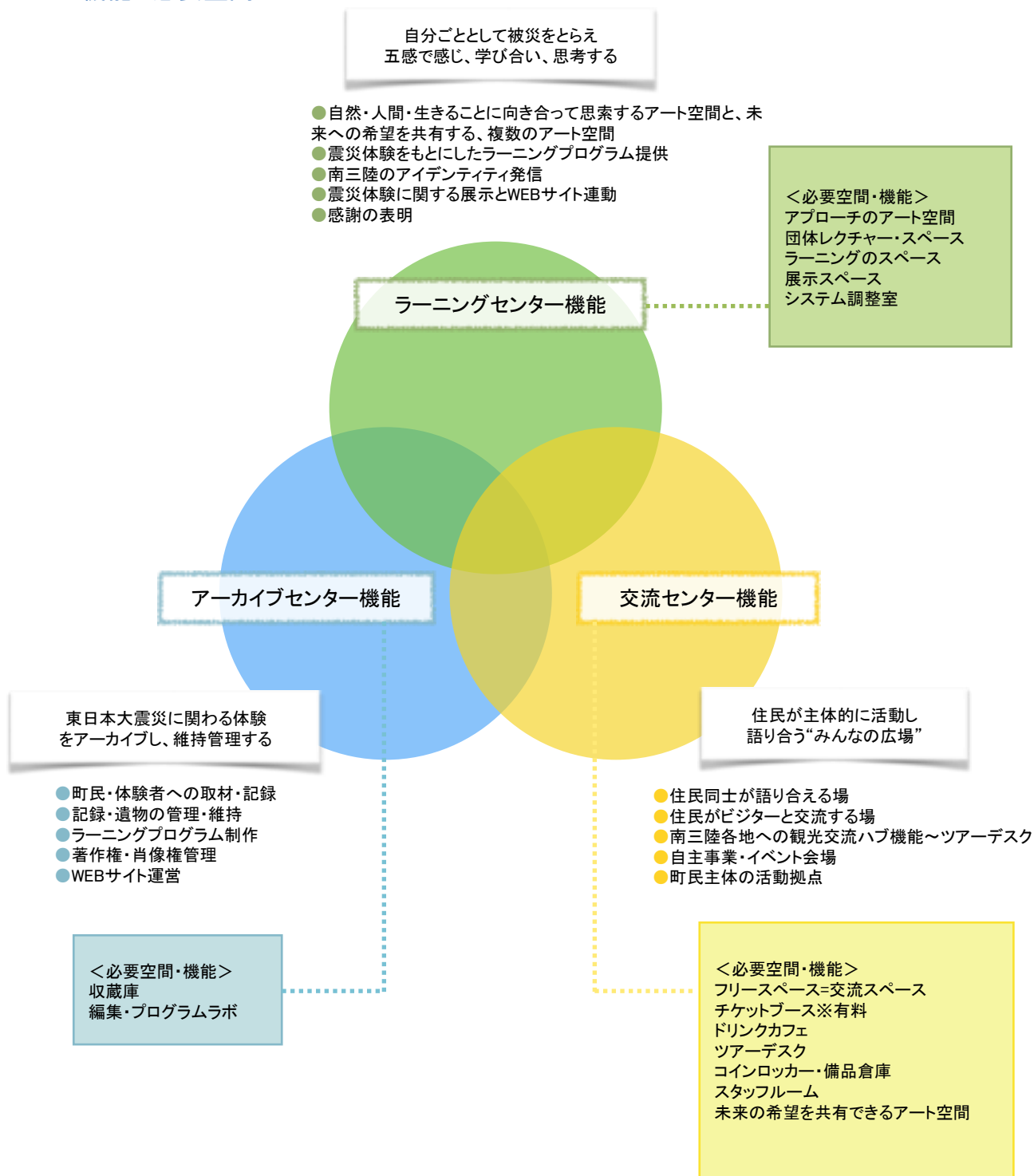
⑥“生きる喜びと希望”を共有するみんなの広場

ラーニングルームから退出した後に入場するフリースペースのアート空間で、来場者は「自らが今ここに存在し生きることの喜びや希望」を感じられるよう導きます。アートの力を活用し、「いのちめぐるまち」南三陸町から、未来への希望を、それぞれの胸に贈り届けます。この震災伝承施設での心の旅を通して、ビジターは最終的に、生きることに前向きな勇気と希望を得ることを目指します。

【事業例として】

- ・町民同士が震災体験を語り合う会、その後の暮らしの変化などを通して感じていることを語り合う会などの定期開催
- ・かつての街並みを映像や写真で見ながら、思い出話に花を咲かせるイベント
- ・防災に関するシンポジウム、写真展、展覧会など
- ・スポンサーや本館ボランティアと町民の交流会
- ・追悼イベント

4 機能と必要空間



6 南三陸町震災伝承施設の管理運営

①管理運営体制

南三陸町震災伝承施設の運営形態は、民間の専門的な技術力や経営ノウハウを幅広く活用し、コストの削減と住民サービスの向上を図るために指定管理者制度での運営とすることを検討します。

ただし、この施設は、映像アーカイブなどの肖像権を伴うデジタル資産や、著作権を伴う資料などを将来まで安全に保管するというきわめて重要な責務を負います。そのため、公益的な資産が安全・適切に保管されているか、適切なラーニングプログラムが提供されているかを定期的にチェックする町直営の監査機関の設置を検討します。

②スポンサーシップによる運営資金確保

施設の維持管理費を確保するため、入館料の他物販等による収益を図ります。また、事業運営に関しては、復興・芸術・教育・まちづくり・福祉等に対する助成金の申請に努めます。

さらに、民間企業などからの協賛・協力・寄付を募るスポンサーシップ制度を設けることも検討し、企業メリットを確保しながら、息の長い関係を創り出せるよう努めます。

各空間の想定面積

	空 間	想定面積	備 考
1	アールスペース1 (ラーニングルームへのアプローチ)	100㎡	ラーニングルームへのアプローチ。本館のテーマを 投げかける空間。
2	ミーティングスペース	120㎡	100名程度の人員が同時に学習できる映像機器の あるレクチャースペース。ラーニングルームへの前 室やポータル機能としてのスペース。
3	ラーニングルーム	144㎡	完全入れ替え制。天井以外がすべてスクリーンと なるAV空間。壁に埋め込み式の簡易スツール使用 。
4	システム管理室	3～5㎡	調光・音響・映像のシステム管理機材を集約。
5	展示スペース付き通路	12～15㎡	通路沿いに展示ケースもしくは展示スペースを設 置。展示スポットライト完備。
6	収蔵庫	36～70㎡	遺物、映像データの収蔵、並びに備品倉庫。
7	アーカイブ編集・教育プログラム室	40㎡	アーカイブ映像、音声編集、並びに教育プログラム 専門員のラボラトリー。
8	チケットブース	6.5㎡	有料エリアのチケットを販売するスペース。
9	事務室	17㎡	運営スタッフの事務室
10	コインロッカー	12㎡	来訪者の荷物の預入場所
11	交流のフリースペース	610㎡	無料エリア。町民がさまざまな活動を行い、交流で きるフリースペース
12	アールスペース2(外部のフリースペ ース)	189㎡	未来への希望を感じさせる、だれもが入ることがで きるアート空間。フリースペースの機能も有する。

維持管理ランニングコスト試算

●設定条件

施設延べ面積1500㎡

※施設全体の面積からの空調負荷、 $1500\text{㎡} \times 0.2\text{kw} = 300\text{kw}$ より、施設の契約電力を業務用高圧受電として算出する。

※運営日および利用時間 開館約300日(週一日、12月29日~1月3日の休館日)、AM10:00~20:00の10時間とする。

室 名	面積(㎡)	項目	仕様	台数	消費電力(KW)	備考
ラーニング ルーム	144	空調機	天井埋設タイプ(7.1KW)	4台	0.96KW	1回45分,10回上映
		室外機	室外機ビルマルチタイプ(8馬力)	1台	6.45KW	
		照明器具	LEDダウンライト(高天井用)	12台	1.73KW	
		プロジェクター	レーザー光源、3チップDLP方式	5台	10.76KW	
		映像音響機器	ミキサー、レコーダー、アンプなど	各1台	0.2KW	
				小計	20.1KW	
アート スペース 1	100	空調機	天井埋設タイプ(7.1KW)	3台	0.72KW	
		室外機	室外機ビルマルチタイプ(8馬力)	1台	6.45KW	
		照明器具	LEDダウンライト(高天井用)	10台	1.44KW	
				小計	8.61KW	
ミーティング ルーム・通路	120	空調機	天井埋設タイプ(7.1KW)	4台	0.96KW	
		室外機	室外機ビルマルチタイプ(8馬力)	1台	6.45KW	
		照明器具	LEDダウンライト(高天井用)	36台	5.19KW	
		映像音響機器	ミキサー、レコーダー、アンプなど	各1台	0.2KW	
				小計	12.8KW	
フリースペース	610	空調機	天井埋設タイプ(7.1KW)	4台	0.96KW	
		室外機	室外機ビルマルチタイプ(8馬力)	1台	6.45KW	
		照明器具	LEDダウンライト(高天井用)	48台	6.92KW	
				小計	14.33KW	
バックスペース	118	空調機	天井埋設タイプ(7.1KW)	4台	0.96KW	
		室外機	室外機ビルマルチタイプ(8馬力)	1台	6.45KW	
		照明器具	LED蛍光灯	40台	1.8KW	
				小計	9.21KW	
アールスペース 2	190	照明器具	LEDスポットライト(屋外用)	10台	0.23KW	
				小計	0.23KW	
				合計	65.28KW	

●東北電力電気料金シミュレーションによる計算結果

※契約電力:130KW、力率:100%、電気使用量:66KW、燃料費調整単価、再エネ発電賦課金等単価込み

月間181,413円(税込)

休館日を考慮した金額→ 月間151,177円(税込)

年間1,814,130円(税込)



豊島美術館 内藤 礼×西沢 立衛



出典:ベネッセアートサイト直島WEBサイトより

クリスチャン・ポルトンスキー 右「ささやきの森」 400個の風鈴が風になびき、静かな音を奏でるインスタレーション。風鈴の短冊には鑑賞者の大切な人の名前が記される。無名の個人を記憶に留め、人間存在の強さや儚さを表現する作品。鑑賞者は、新たに自分の大切な人の名前を残すことができる。



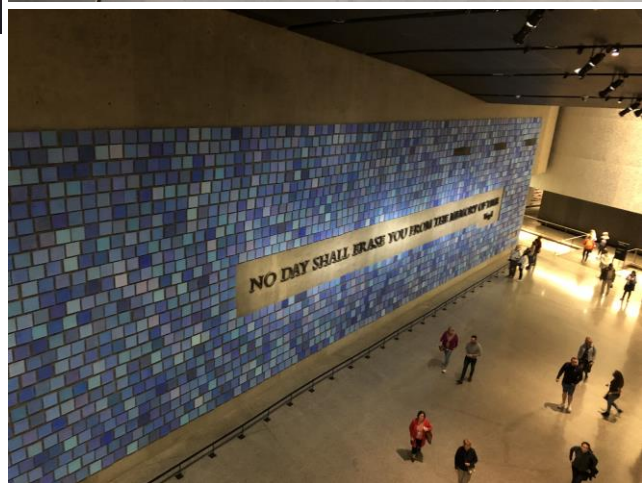
国境を越えて・潮 リン・シュンロン(林舜龍)

ビーチに196体の子どもの像を設置。海に消えた子どもをイメージし、196は日本が承認する世界の国の数を示す。首に下げたプレートには各国の首都の座標と大部港からの距離が記されている。



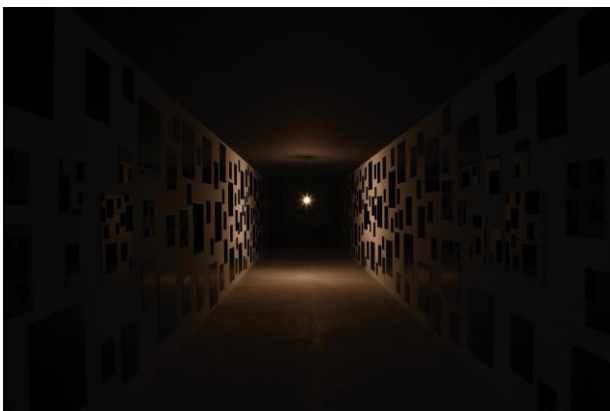


クリスチャン・ボルタンスキー No Man's Land



ニューヨーク市911メモリアル

メモリアルホールにある青い壁は市民とアーティストとの協働で生まれたアート作品。9.11の青空をひとりひとり再現した。古代ローマの詩人ウェルギリウスの言葉が刻まれる。No Day Shall Erase You From Memory” ～ いかなる日も、あなたを時の記憶から消し去ることはない～



出典:ベネッセアートサイト直島WEBサイト

クリスチャン・ボルタンスキー 心臓音のアーカイブ

クリスチャン・ボルタンスキー／

フランスの彫刻家、写真家、画家、映画監督、現代アーティスト。兄は社会学者のリュック・ボルタンスキー。制作活動の初期から、個人の記憶や存在、不在を作品の主なテーマとしている。1944年にナチス占領下のパリで生まれる。父親は改宗ユダヤ人であったため、フランス人の母親と離婚して家を出て行ったように偽装し、家の床下に隠れ住んでいた。終戦後母親やその友人から聞かされた強制収容所の話を含むこれらの経験がボルタンスキーのトラウマとなり、後年の作品制作に影響している。日本との縁が深い芸術家で、早くも1960年代にテレビ番組の取材で来日している。国際展では越後妻有アートトリエンナーレ(2000年～)と瀬戸内国際芸術祭(2010年)に参加、2006年には高松宮殿下記念世界文化賞を受賞している。2019年には大阪、東京、長崎で大規模な回顧展を開催する。